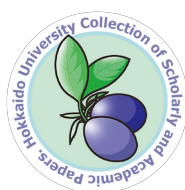




Title	日本語のヴォイス体系における再帰態の妥当性の検討
Author(s)	黄, 銘君
Citation	研究論集, 25, 187 (左) -208 (左)
Issue Date	2026-01-16
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgshhs.25.l187
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98771
Type	departmental bulletin paper
File Information	13_rjgshhs_25_p187-208_l.pdf



日本語のヴォイス体系における再帰態の 妥当性の検討

黄 銘 君

要 旨

本稿は、日本語におけるヴォイス体系の中で再帰態が占める位置とその有効性を検討するものである。従来研究においては、能動・受動・使役を中心とするヴォイスの枠組みは概ね共有されているものの、自他対応、可能態、再帰態といった周辺のカテゴリーの扱いについては議論が分かれ、日本語のヴォイス記述に一貫性を欠いてきた。さらに、能動は形態的に無標であるため、受動や使役と同列に論じることの妥当性にも問題がある。

本稿ではまず、能動・受動・使役を中心とする従来のヴォイス定義と分類を先行研究に基づき整理し、自他対応、可能態、再帰態など周辺のカテゴリーの扱いに揺れがあることを指摘する。次に、一般言語学の枠組み、とくに Shibatani (2006) や Zúñiga & Kittilä (2019) の理論を参照し、ヴォイスを形態的变化に限らない概念的カテゴリーとして再定義し、再帰態を中動態の中核として位置づける立場を確認する。

日本語では形態的な再帰標識や再帰動詞は存在せず、再帰性は意味や文脈によって解釈されるため、伝統的なヴォイスの定義（形態変化・格交替）に基づいては再帰態を明確に区別できない。しかし、意味論・認知意味論的視点を導入することにより、再帰態をヴォイス体系に含める理論的基盤を構築することが可能であることを示す。

1. はじめに

本稿では、日本語における「ヴォイス（態）」の概念とその体系的構成に焦点を当て、とりわけ再帰態の有効性とその分類上の位置づけについて検討する。

ヴォイスとは、動詞の形態変化と格構造の変化に関わり、事態において関与する要素のうち、どの関与者が文の焦点として表現されるかを示す文法的カテゴリーである。

一般に、日本語では受動態・使役態が中心的なヴォイスとして広く認識されてきたが、それに加えて、可能態、自発態、自他対応、さらには再帰・相互構文などをヴォイスの現象として論じる立場も存在する。また、能動態の扱いについては、中心的ヴォイスと同列に置くか否かについて先行研究間で揺れがある。能動は形態的に無標であることから、受動や使役と同列に論じることの妥当性には疑問が残る。

さらに、再帰態の扱いについては、先行研究において見解が分かれており、その体系内での位置づけは多様である。たとえば、村木（1991）や高橋（1985）は、動作主体が自ら作用を及ぼすような表現を再帰態（*reflexive voice*）と捉え、ヴォイスの一種に含めている。一方、早津（2005）は、再帰態を日本語においては文法カテゴリーとして認めがたいとし、これを「対応自他動」の問題に帰属させる立場を取っている。

本稿ではまず、日本語におけるヴォイスの定義に関する先行研究を概観し、再帰態がどのように取り扱われてきたのかについての議論を整理する。さらに、一般言語学におけるヴォイスの議論を踏まえ、ヴォイスの概念および再帰態の起源を明らかにした上で、日本語の態体系に再帰態を含める妥当性を再検討することを目指す。

2. 日本語におけるヴォイスの定義

本節では、ヴォイスに関する従来の先行研究を概観する。これまでの先行研究では、ヴォイスをめぐる多様な議論が展開されてきたが、主に以下の二つの側面に注目が集まっている。すなわち、「格構造の変化に伴って、動詞の形態が変化する」という形態的な側面と「ある事象において動作や作用がどの関与者を中心として表現されるか」という意味的側面である。

先行研究において、ヴォイスの分類や捉え方には相違が見られるものの、能動態、受動態、使役態が中心的なヴォイスとして位置付けられている点はほぼ共通している。ここでは、先行研究を取り上げ、その特徴と相違点を整理していく。

2.1 金田一春彦（1954）

金田一（1954：235）はヴォイス（相）とは、動詞の表す動作・作用に対して主語がどのような関係に立つかを区別して示す語形変化であると定義している。また、ヴォイスの分類として、一般的に能動態、受動態、使役態と中相態¹が設けられているとし、さらに、自然可能態²も中

¹ 金田一（1954）は中相態について、インド・ヨーロッパ語では受動態が発達する以前に存在した形式であり、「受動的な意味をもった、受動態ならざる自動詞」という意味であると述べている。例えば、英語の“The book sells well”における“sell”が「売れる」という意味で用いられる点はその典型的な例である。また、日本語では「中相態」という用語が好まれる傾向にあり、「中相動詞」と呼ぶべき語として、「煮エル（煮た状態になる）、売レル（売った状態になる）、くズレル（くずれた状態になる）、

相態に類似したものとして挙げている。

- (1) 書ク (能動態)
- (2) 書カセル (使役態)
- (3) 書カレル (受動態)
- (4) 書ケル (コナン字が書ケテシマッタノ書ケル) (中相態)

(金田一 1954)

2.2 鈴木重幸 (1972)

鈴木 (1972) はヴォイスを「たちば」という用語で説明し、「動詞にはうけみのたちば、つかいだてのたちば、できるたちばがある」と述べている。鈴木 (1972) はヴォイスを以下のように論述している。

動詞のたちば (voice) とは、動詞のあらわす動き・状態の主体・対象やそれに関係する第三者と主語・対象語との関係をあらわす文法的なカテゴリーである。すなわち、動詞のたちばによって、動詞の語法的な意味としてしめされる動き・状態の主体・対象やそれになんらかの関係にある第三者などの、どれを主語とし、どれを対象語としてあらわすかがきめられるものである。たとえば、接尾辞「れる／られる (-are-ru / -rare-ru)」「せる／させる (-ase-ru / -sase-ru)」などをつけてつくられる文法的な派生動詞によってあらわされる。

(鈴木 1972 : 275-276)

2.3 仁田義雄 (1981)

仁田 (1981) はヴォイスに関して、以下のように論じている。

「『態』とは、動詞の形態的な範疇であるとともに、動詞の表す動作や作用の成立に関与する関与者のどれを中心にして、その動作や作用の実現を把握・表現するか、といったことにかかわるものである。動作や作用は、その実現に必要な関与者が決まっている。それが「格」である。態は、そういった動作や作用の語彙的意味によって決まってくる関与者間の相互関係の図式を、何を中心として把握・表現するか、それがいかなるありかたを取る実現であるといった、動作図式、作用図式の把握の仕方にかかわるものである。一般に、日本語の態としては、能動、

キマル (きめた状態になる)」などがあるとされている。

² 金田一 (1954 : 240) は「心なき身にもあわれは知られけり (西行)」という例をあげ、「自然可能態」の特徴は「動作・作用が自然に行われること」にあり、「状態の変化」を表す中相態とは意味的に区別されるべきであると指摘している。

受動、使役、可能、自発などの態があげられる。能動や受動や使役の態と自発や可能の態とは、基本的な性質を異にしている。敬讓や希望は態ではない。敬讓は待遇性の問題であり、希望は表現意図の問題である。狭義では、態は能動・受動・使役に限定するほうがよいだろう。更に、態の体系の基本は、能動態と受動態の対立である。」

仁田 (1981 : 110)

なお、仁田 (1981) によるヴォイスの分類は以下のように整理できる。

狭義のヴォイス：能動態、受動態、使役態

広義のヴォイス：能動態、受動態、使役態、可能態、自発態など

2.4 寺村秀夫 (1982)

寺村 (1982 : 208) は日本語のヴォイスを「補語の格と相関関係にある述語の形態の体系」と規定している。また、格の移動に伴い、述語に予測可能な形態素の変化が現れる場合は「文法的な態」とされ、そうでない場合、すなわち辞書的に個別に記述されるようなものは「語彙的な態」として扱われている。

(5) 太郎が浜辺デ亀ヲツカマエタ。

(6) 亀ガ浜辺デ太郎ニツカマエラレタ。

(7) 亀ガ浜辺デ太郎ニツカマッタ。

(寺村 1982)

(5) は太郎を主語とする能動文であるが、(6) のような直接受身文では (5) の述語「つかまえる」の語幹に「-areru」という接辞が付加され、「亀」が主語となり、「太郎ガ→太郎ニ」、「亀ヲ→亀ガ」といった格の移動変化が見られる。このような構造は「文法的な態」の一つの型とされている。寺村 (1982) は「格の移動と動詞の形態の相関関係」は重要であり、無視すべきではないと主張している。

一方、(7) のように自動詞句構文に転換される場合、これは規則的な派生ではなく、「語彙的な態」として扱うべきだとされる。「捕まる」のような自動詞表現と (6) のような受動態表現の間には意味的な連続性が存在し、単に形態上の規則性や生産性が高いという記述だけでは不十分であると指摘している。

さらに、以下のような例に見られる相互動作や授受表現についても検討されている。

(8a) 太郎ガ花子ト結婚シタ。

- (8b) 花子ガ花子ト結婚シタ。
- (9a) 小津ガ篠田ニ影響ヲ与エタ。
- (9b) 篠田ガ小津ニ影響ヲ受ケタ。
- (10a) 太郎ガ猿ニミカンヲヤッタ。
- (10b) 猿ガ太郎ニミカンヲモラッタ。

(寺村 1982)

(8a) (8b) のように、格の構成要素が変化しても述語形態は変化しない場合、それはヴォイスのカテゴリーには含まれない。また、(9a) (9b), (10a) (10b) のように格の移動を伴っても述語が変化しない場合、これらは語彙的な対立に過ぎないとされ、ヴォイスとは異なる現象であると論じられている。

以下、寺村 (1982) によるヴォイスの捉え方を整理する。

文法的な態：受動態、可能態、自発態、使役態

語彙的な態：自他対応

2.5 村木新次郎 (1991)

村木 (1991 : 1) はヴォイスの定義について、次のように述べている。「ヴォイスは動詞の文法範疇のひとつではあるのだが、動詞自身の形態的な対立関係を問題にする点に、他の文法範疇と区別される特徴がある。というよりも、むしろ、ヴォイスにとっては、文の関与者のうちのメンバーを中心にのべるかという文の意味構造が主役で、動詞の形態は文の意味構造にもとづく統語論的な側面と、述語になる動詞がどのような形態をとるかという動詞の形態論的な側面の相互関係の体系であるといえる」。つまり、村木 (1991) によれば、日本語におけるヴォイスとは動詞の形態と文の意味構造の相互関係に基づく体系³であると捉えることができる。

また、村木 (1991 : 2-3) は、ヴォイスと関係する文のタイプとして、次の八つの文型を挙げている。「受動文」「使役文」、「自動詞文と他動詞文」、「相互文」、「再帰文」、「可能文、希望文、自発文」、「授受文」「てある文」。

2.6 益岡隆志・田窪行則 (1992)

益岡・田窪 (1992 : 101) はヴォイスを次のように定義している。

³ 村木 (1991) によれば、言語使用において、文脈・場合・状況に応じて話し手が選びとる文の意味構造を実現する役割を担っているのが動詞の形態であり、その動詞の形態は「文の意味統語論的な機能に対応して分化している」とされる。

「接辞の付加に伴って補足語の格が規則的に変更する現象にかかわる文法形式」。

たとえば、「子供が叱られる」のような受動表現では、接辞「(r)areru」が付加されることにより、「を」格が「が」格に変化する。また、「子供を寝させる」のような使役表現では、接辞「(s)aseru」が用いられ、「が」格が「を」格へと変化する。これらのように、格の交替を伴う構文がヴォイスの代表的な表現であるとされている。

さらに、益岡・田窪は、接辞「(rar)eru」を付加する可能表現についてもヴォイスの一種として位置づけている。特に、もとの動詞が他動詞である場合には、「を」格が「が」格に変更されることがその特徴として挙げられる。

2.7 早津恵美子 (2005)

早津 (2005: 35) はヴォイスを次のように定義している。

「動詞の表す動きの成立に関わるいくつかの要素のうちいずれを主語として述べるかを、動詞の語形変化によって表しわけの文法カテゴリー」

また、早津 (2005) はヴォイスを以下のように分類している。中心的なヴォイスには「原動⁴」「使役」「受身」および「対応自他動」が含まれ、周辺のヴォイスとしては、「シテモラウスル」「シテヤル／シテクレル-シテモラウ」のほかに、「可能」「自発」「シテアル」が挙げられている。さらに、早津 (2005) によるヴォイスの分類は以下のようにまとめることができる。

中心的なヴォイス：能動態、使役態、受身態、自他対応

周辺のボイス：「シテモラウスル」、「シテヤル／シテクレル-シテモラウ」、可能態、自発態、「シテアル」

2.8 佐藤琢三 (2005)

佐藤 (2005) は、仁田 (1981) および寺村 (1982) の立場を踏まえ、仁田が述べた「ヴォイスの体系の基本は能動と受動の対立である」という見解を概観しつつ、寺村 (1982) の見地に立って、受動だけではなく、使役や自他対応もヴォイスの体系の枠組みに含まれると主張している。

さらに、佐藤 (2005) はプロトタイプ論の観点からヴォイスを次のように定義している。

⁴ 早津 (2005) が用いる「原動」という術語は接辞が見つからない「能動」に相当する用語である。

概念規定：主語を中心とした事態の関与者と述語の表す動きとの意味的關係を示すカテゴリー。

- (a) 形態：二つの文に格の交替を伴いうる述語の形態的対立が認められる。
- (b) 統語：二つの文の主格の名詞句が義務的に異なる。
- (c) 意味：二つの文がともに動きを表す。

(佐藤 2005 : 193)

このような定義に基づき、佐藤 (2005) は以下のような例を取り上げ、可能態がヴォイスのプロトタイプから逸脱していることを示している。

- (11a) 雅子さまがフランス語を話す。
- (11b) 雅子さまがフランス語を話せる。
- (11c) 雅子さまにはフランス語が話せる。
- (12a) 選挙民が細川氏を選出した。
- (12b) 細川氏が選挙民によって選出された。

(11b) では (11a) と主格の名詞句が同じであり、(11c) では異なっている。したがって、統語条件 (b) が常に満たされているとは言えず、プロトタイプのヴォイスの定義から逸脱していると考えられる。

加えて、(11b)、(11c) はいずれも主体の非意志的状态を表す点で、(7a) の能動文とは性質が大きく異なっており、ヴォイス体系には含まれにくいとされる。

一方、(12a)、(12b) では、関与者と述語を表す動きという意味的關係が明確に捉えられ、プロトタイプの条件を満たしている。

2.9 林青樺 (2009)

林 (2009) はヴォイスの定義について次のように述べている。

ヴォイス (態) というのは、事象に関わる参加者が文においてどのような役割を果たしているのかという点に関わる文法的な概念であり、二つの文が互いに形態的 (文の述語) ・統語的 (文の必須要素である名詞句) ・意味的な対立關係を成すことを表わすものである。

(林 2009 : 17)

2.10 日本語記述文法研究会 (2009)

日本語記述文法研究会 (2009: 207) はヴォイスを次のように記述している。

ヴォイスとは、事態の成立に関わる人や物を表す名詞が、どのような形態的なタイプの動詞とともに、どのような格によって表現されるかに関わる文法カテゴリーである。

この定義において、ヴォイスの中心的な表現としては、無標の能動文および有標の受身文と使役文が挙げられている。さらに、以下のように分類されている。

中心的なヴォイス表現：能動文，受身文，使役文

周辺のヴォイス表現：可能構文，自発構文，相互構文，再帰構文

(日本語記述文法研究会 2009: 208-209)

- (13) 田中が佐藤をたたいた。(能動文)
- (14) 佐藤が田中にたたかれた。(受身文)
- (15) 鈴木は田中に佐藤をたたかせた。(使役文)
- (16) 私はインド料理が作れる。(可能構文)
- (17) 私にはふるさとが懐かしく思い出された。(自発構文)
- (18) 私は思わず山本さんと見つめあっていた。(相互構文)
- (19) 私は舌をかんでしまった。(再帰構文)

また、日本語記述文法研究会 (2009) は再帰構文について、「対象を表すヲ格名詞をとる他動詞が対象に対する働きかけを通して、主体自身に対する働きかけも行うというもの」と定義している。以下の例は対象を表す名詞として身体部位あるいは付着物をとっている例である。(21) のように、着衣動詞を用いる例では、「他動詞でありながら自動詞に近い意味関係をもっている」と指摘されている。

- (20) 手を上げて、横断歩道を渡る。
- (21) 私は浴衣を着た。

ただし、この定義はヴォイスを格・意味的側面から規定しており、ヴォイスをまず形態的な文法範疇として捉える立場からは妥当性に疑問がある。日本語におけるヴォイスは接辞「-rare」(受動)や「-sase」(使役)によって標示され、能動は形態的に無標であるため、これらを同列に扱うことは理論的に問題が残る。この点については、第3節で改めて問題点として整理する。

2.11 金水敏 (2014)

金水 (2014: 43) はヴォイスについて次のように述べている。

ヴォイスとは、欧米語では能動相に対して受動相 (passive)、中相 (middle) 等の動詞の形態を総称する概念である。これを動詞の形態と項構造の対比に関する範疇と捉えるなら、日本語では (ラ) レル形 (受動, 自発, (尊敬)) に加えて, (サ) セル形 (使役) もヴォイスの枠内で捉えるのが適切である。

さらに、日本語では自動詞と他動詞に形態的対立が存在するため、動詞の自他 (他動性) もヴォイスと連続的な関係にあると考えられる。

加えて、可能動詞 (「書ける」「読める」等) および、いわゆる「ら抜きことば」と呼ばれる「見れる」「食べれる」などの形式もヴォイスの系列に含まれるものとして捉えることができると論じている。

3. 日本語にけるヴォイス研究の問題点

前節では、日本語におけるヴォイスの定義や分類に関する代表的な先行研究を概観し、その分類が多岐にわたっていることが観察された。以下では、それらの先行研究に見られる主な問題点を整理する。

まず、ヴォイスをどのように定義するかについては、研究者の立場によって大きな差が見られる。例えば、日本語記述文法研究会 (2009) の定義に代表されるように、ヴォイスを意味的・統語的な観点から説明する立場がある。しかし、このような立場はヴォイスを形態的な文法範疇とみなす観点からは十分ではない。意味や格シフトの変化はヴォイスに伴って派生的に生じることが多いが、ヴォイスそのものは本来、テンスやアスペクト、ムードと同様に、形態的側面に基づいて区別される文法カテゴリーとして捉えられる。日本語においては接辞「-rare」(受動) や「-sase」(使役) がヴォイスを標示しており、能動は形態的に無標として理解されるため、これらを単純に同列に並べて分類することは適切とは言い難い。さらに、林 (2009) もヴォイスを意味的観点に基づいて規定しており、日本語記述文法研究会 (2009) と同様に、形態素に基づく文法範疇としてのヴォイスの性質を十分に捉えているとは言い難い。

また、「自他対応」をヴォイス体系の枠組みを含めるか否かという点で、先行研究の立場に違いが見られる。寺村 (1982) は自他対応をヴォイスに取り込むべきであると最初に提唱したが、これに対しては、ヴォイスに含める立場 (村木 1991, 早津 2005, 佐藤 2005, 金水 2014) と含めない立場 (益岡・田窪 1992, 日本語記述文法研究会 2009) がある。

特筆すべきは「文法的な態」と「語彙的な態」を区別して検討する立場が少数である点である。その中でも、早津 (2005) は自他対応を中心的なヴォイスの一種として捉え、村木 (1991)

はヴォイスの枠組みに含めており、佐藤（2005）は原型的ヴォイスの類型として位置付けている。

次に、可能態をヴォイスとして認めるか否かという点にも議論の余地がある。多くの先行研究が可能態をヴォイス体系に入れているが、佐藤（2005）のようにプロトタイプ条件を満たさないとして除外する立場も存在する。また、早津（2005）が扱った授受表現や「シテアル」文のような周辺のヴォイスに関する議論は他研究ではあまり見受けられないようである。

さらに、再帰態、相互態などの扱いに関しても、立場の分岐が見られる。例えば、村木（1991）や日本語記述文法研究会（2009）はこれらをヴォイスの一種として扱っているが、他の研究では体系的に検討されていない。本稿では、再帰態の有効性を主題として扱うため、再帰態に関する議論に焦点を当て、先行研究における見解の相違や問題点を考察する。

ヴォイスの一形態として再帰態を認める研究には、村木（1991）や高橋（1985）などがある。村木（1991：25）は他動詞用法の中に動作主体みずからに向けられる動作を意味する再帰性⁵を持つものがあると指摘し、以下のような動詞を再帰動詞の例として挙げている。

「浴びる」「着る」「(靴下を)はく」「(肩)をすくめる」「(首を)かしげる」「(まゆを)しかめる」。

例えば、次の例に見られるように、「浴びる」(22a)は自分自身に対して用いられる再帰的な動詞であるが、「浴びせる」(22b)は他者への動作を表し、再帰性を持たないとされている。

(22a) 太郎は(頭から)冷水を浴びた。 (村木 1991：25)

(22b) 太郎は花子に冷水を浴びせた。 (村木 1991：25)

ただし、村木（1991）が挙げた再帰動詞の例の一部については、用法の妥当性に検討の余地がある。例えば「眉をしかめる」は、基本的には「顔をしかめる」の転用と考えられ、他の身体部位（「目」「口」など）を目的語とすることはできない。このような用例は再帰動詞の典型とみなすには慎重さを要するだろう。

また、村木は「(自分の)手をたたく」「(自分の)足を折る」「腰を痛める」などの表現にも再帰性が認められると述べ、さらに、「風邪をひく」、「下痢をする」「くしゃみをする」、「汗をかく」といった病理・生理現象に関わる表現についても、他動性を欠きながら再帰性の特徴を持つと指摘している。

一方、高橋（1985）は「花子が足をおった」のような文を例に、「再帰態 (reflexive voice)」をヴォイスのカテゴリーの一種として挙げているが、早津（2005）はこれに対して、「言語によっ

⁵ 村木（1991）は再帰性とは他動詞でありながらその動詞の意味する運動が動作主体自身に向けられるという性質を指すとされる。

ては文法カテゴリーとして再帰態を認め得る言語もあろうが、日本語ではむずかしい」と批判的である。また、「足をおった」が「花子は足がおれた」のような自動詞文と同様、主語が変化を被る主体であるという点で、「対応自他動」の問題とも関わっていると述べるが、具体的な考察はなされていない。

以上のように、日本語におけるヴォイス研究では、自他対応の扱いや可能態・再帰態の位置づけに関して明確な扱い方がなされておらず、その定義や分類にも大きな揺れが見られることが明らかになった。こうした課題は、ヴォイスという概念自体に対する理論的枠組みの相違が関係していると考えられる。そこで次節では、一般言語学におけるヴォイスの捉え方に目を向け、先行研究を概観することで、日本語におけるヴォイス現象を捉えるための理論的枠組みの再検討を試みる。

4. 一般言語学におけるヴォイスの概念

4.1 亀井ほか（編）（1996）

亀井ほか（編）（1996：865）によれば、態（voice）とは、動詞が表す動作と動作主・受動者の関係を文法的に標示する範疇であり、印欧語では主に能動態と受動態の対立として実現される。また、古代印欧語における中動態の存在は、受動態や再帰動詞の発展に重要な役割を果たしているとされる。

また、亀井ほか（編）（1996）は態について次のように記している。

態（voice）は印欧語の動詞の文法範疇の一つであり、英語などでは、能動態（active voice）と受動態（passive voice、被動態ともいう）の区別として表わされている。これは、動詞の表わす動作と、その動作を起こす者（動作主 agent）、および、その動作を受ける者（受動者 patient）との関わり合いを示すもので、その動作を起こす者が主語となる場合は、その動詞は能動態の形をとり、その動作を受ける者が主語となる場合は、その動詞は受動態の形をとる。たとえば、英語で、Jack hit Paul.「ジャックはポールをなぐった」の hit は能動形（active form）、Paul was hit by Jack.「ポールはジャックになぐられた」の was hit は受動形（passive form）である。この2つの表現は、同じ事態、すなわち、ジャックがポールをなぐったことを述べているが、主語の選択が違っており、受動態では、能動態の目的語が主語に転換している。

そして、受動態が起こるのは、印欧語のような、主語を必ず明示する両肢言語（→単肢言語と両肢言語）においてはじめて可能である。大体、受動態の表現は、その動詞が目的語を要求する他動詞に限られるのであるが、能動態の表現で目的語となるものに焦点を合わせて主語と見立てることによって、動詞の方を受動形に変えなければならない。しかし、日本語のような単肢言語にも、態に類似する現象は観察される。

受動形は、印欧語全体の長い歴史の発展の中で、はじめからあったものではないらしい。ギリシア語やサンスクリットのような古い印欧語には、受動態とは違う、中動態 (middle voice) とよばれるものがあって、能動態と対立していた。この対立を、diathesis とよぶ。中動態とは、動詞の表わす動作が主語となるもの自身に戻ってくる場合である。たとえば、ギリシア語で、λούω は「私は洗う」で能動形であるが、λούομαι は「私は私自身を洗う」で中動形 (middle form) であり、人称語尾を異にする。この中動形が受動態に用いられるようになったのであるが、これは中動態では主語のさすもの自身が動作の目的になるので、その中に目的語の主語への転換の契機が含まれているからである。後世の多くの印欧語にみられる再帰代名詞 (reflexive pronoun) を伴う再帰動詞 (reflexive verb) は、この中動態の延長上にあるもので、この再帰動詞も、しばしば受動的な意味に用いられる。なお、サンスクリットには、第二次活用として受動語幹 (-ya-) があり、ギリシア語の中動活用の一部に受動を示す要素 (-θη-) がみられる。

4.2 Shibatani (2006)

Shibatani (2006: 229-230) は、従来のヴォイスの定義が主に統語的変換 (主語と目的語の入れ替えなど) に基づいており、意味の変化を伴わないことを前提としている点に問題があると指摘する。たとえば、Crystal (2003) の定義⁶では、ヴォイスとは「主語と目的語の関係を変える文法カテゴリーであり、意味は変わらない」とされているが、Shibatani (2006) はこの定義がヴォイスの本質を捉え損ねていると批判し、ヴォイス現象は単なる文法的操作ではなく、人間の行為に対する認知に根ざした概念的な枠組みとして理解されるべきであると主張する。

この立場に基づき、Shibatani (2006: 217) はヴォイス現象を人間の行為に対する認知に根ざした概念的基盤をもっており、行為の「進化的特性 (evolutionary properties)」すなわち行為の起源、発展、終結を基盤とする概念として再定義する。Shibatani によれば、言語は文法的対立の体系を通じて、話し手が伝達の目的に応じて重要だとみなす行為の進化的特性に関する概念的対立を表す手段である。

Shibatani (2006) は、これまでの能動・受動の対立という限定的な枠では説明できなかった、再帰・中間・自発・意志・使役・逆受動・能格・分裂格標示 (split case-marking) といった多様

⁶ Shibatani (2006: 264) では Crystal (2003) によるヴォイスの定義が次のように説明されている。「態 (Voice)」とは、文や節の構造を文法的に記述する際に用いられるカテゴリーであり、主に動詞に関して、文が動詞の主語と目的語の関係をどのように変化させ得るかを表すために使われる。このとき、文の意味そのものは変わらない。主要な区別は「能動態」と「受動態」の間にある。…他の言語では、さらに別の態の対立が見られることもある。たとえば、ギリシア語の「中動態」には「再帰の意味」をもつ動詞 (She cut herself 「彼女は自分自身を切った」) が含まれる。また、言語において態と関連するいくつかの構文 (たとえば、「再帰」「使役」「非人称 (impersonal)」構文なども存在する。」

な現象を詳細に分析し、これらもヴォイスの一形態として捉えるべきであり、能格態／逆受動態の対立、使役構文、再帰構文、中動態、分裂格標示などもヴォイスの領域に含まれるべきだと論じる。これは、印欧語中心の定義が恣意的にヴォイスの範囲を限定してきたことへの批判であり、たとえばインド・ヨーロッパ語族における能動態と中動態の対立は、「行為が行為者の個人的領域にとどまるかどうか」という概念的対比に基づいているとされる。

とりわけ再帰文に関して、Shibatani (2006: 218) は Crystal (2003) の定義が再帰をヴォイスのカテゴリに入れていない点を批判し、再帰構文を中動態の一部として明確に位置づける。再帰文は「ヴォイスに関連する構文」とは認識されているものの、「適切なヴォイス構文」とは見なされておらず、中動態との関係性も不明瞭であると指摘されている。たとえば“John hit himself”という表現は、「行為が行為者の個人的領域（自身の身体）内で完結する」という点で、“John hit Bill”のように領域外に作用が及ぶ通常の能動文とは明確に区別される。また、古代ギリシャ語の“louô khitôna”（シャツを洗う）と“louômai khitôna”（自分のシャツを洗う）の対比に見られるように、項構造が変化せず、同一でも意味的差異が生じうることを示し、意味に基づいたヴォイスの理解の重要性を強調する。(Shibatani 2006: 232-236)

以上より、Shibatani (2006) では、ヴォイスは必ずしも動詞の形態変化や統語構造の項の変化を伴う必要はないとし、行為の意味内容や参与者の関与の様態こそがヴォイスの中核であると考える。たとえば、再帰態や中間態は行為の始点と終点が一致する事態型（participant merger）と見なされ、また能格構文・逆受動・自発・意志の区別も、意図性や制御性といった概念的パラメーターにより説明される。

さらに Shibatani (2006: 217) は、Hopper and Thompson (1980) が特定した「他動性パラメーター」の多くが、行為の「起源」「発展」「終結」といった進化的な特性に関係していると述べている。Shibatani (2006: 222) は、この行為の進化的な特性が主要なヴォイスパラメーターの基盤となると提唱している。Shibatani (2006) が提示するヴォイスの概念的パラメーターは、以下の問いの形で表現される。

行為の起源：行為はどのようにして引き起こされるか、どこで起源を持つか、動作主の性質は何か。

行為の発展：行為は動作主の個人的領域を超えて広がるか、それともその領域内に限定されるか。また、明確な受動者に意図された効果を達成するか、失敗するか。

行為の終結：行為は通常の過程を超えて発展し、事態の直接の参加者を超えて追加の実体で終結するか。

こうした立場を踏まえて、Shibatani (2006: 222) はヴォイスの概念的パラメーターを提示し、通言語的な枠組みにおいて多様なヴォイス現象を分析している。

I. 行為の起源に関するパラメーター：

意志性／自発性の対立 (Volitional/Spontaneous Opposition)：「行為は意図的に引き起こされるか。」名詞の形態によっても表現されることが強調され、ヴォイスが動詞カテゴリーに限定されないことが示されている。

例えば、日本語やインドネシア語では、自発的な行為を表現するために特定の形態素（例：日本語の「-re/-rare」、インドネシア語の“ter-”）が使用される。この対立は、従来の定義ではヴォイス現象として広く認識されていなかったが、柴谷はこの区別が世界中の言語で広く見られることを示し、ヴォイス現象であると主張している。

(23a) 僕はよく昔のことを思う。(意志性)

(23b) 最近昔のことがよく思われる。(自発性)

(24a) Ali memukul anak-nya. (意志性) (Ali hit his child)

(24b) Ali ter-pukul oleh anak-nya. (自発性) (Ali accidentally hit his child)

(Shibatani 2006: 224)

使役／非使役の対立 (Causative/noncausative Opposition)：行為が主たる行為の行為者から生じるのか、それとも行為連鎖の先頭に立つ別の行為者から生じるのか、という起源に関する対立である。使役構文は、新たな行為の起点となる追加の存在を伴うため、動詞の項の数を増やす機能を果たす。使役は形態論的な概念ではなく、意味的な概念として捉えられ、語彙的使役、形態的使役、迂言的使役といった多様な表現タイプが含まれる。

II. 行為の発展に関するパラメーター：

このパラメーターは、行為がどのように発展するか、行為者の個人的な領域を超えて広がるか、またはその領域内に限定されるか、意図された影響が明確な受動者に達成されるかどうかに関心がある。

能動態／中動態の対立 (active/middle voice opposition)：

Shibatani (2006) は能動態と中動態の対立は、古代ギリシャ語やサンスクリット語といった古典インド・ヨーロッパ語の研究において最もよく知られており、行為が行為者の個人的な領域を超えて広がり、明確な受動者に影響を与える場合が能動態、行為の発展が行為者自身の個人的な領域内に限定され、その効果が行為者自身に蓄積する場合が中動態であるとされる。

Shibatani (2006) の枠組みでは、再帰構文、典型的な中動態、単一参加者事象（自動詞の行為）のすべてが、行為が行為者の領域内に限定されるという共通の概念的特徴を持つ「中動態」の領域に含まれる。これは、形式的な標識の有無ではなく、行為の概念的性質に基づいてヴォイ

ス現象を統一的に捉えるものである。

例えば、再帰構文 (Reflexive Constructions) は、行為が行為者自身の個人的な領域内に限定される最も明確なケースの一つであり、紛れもなく中動態タイプに含まれるとされている。英語の例では、“John hit himself” (ジョンは自分を叩いた) が挙げられる。この場合、叩くという行為はジョン自身の個人的な領域内で完結している。バリ語の例では、“nyagur awak” (自分自身を叩く) がある。これは迂言的な (periphrastic) 中動態の形として示されている。ロシア語の例では、“Ivan ubi-l sebj-a.” (イワンは自身を殺した)」が挙げられる。これらは再帰代名詞を使用することで行為が行為者自身に限定されることを示している。

典型的な中動態は、中動態接辞などによって形態的に表現される中動態を指すとされる。行為が行為者の身体の手入れなど、個人的領域内で行われる場合が多いと指摘している。例えば、バリ語の例では、“ma-cukur” (ひげを剃る) は形態的な中動態の例として挙げられており、古代ギリシャ語の例“louómai khitóna.” (私は自分のシャツを洗う／私は自分のためにシャツを洗う)」などが挙げられる。これらは形態的な中動態であり、項の配列を変更せずに意味の対立を表現すると述べている。

また、中動態の標識を伴わず自動詞を語彙化された中動態形式とみなされるバリ語の例、“negak” (座る) をあげながら、これは動作の発展が行為者の領域内に閉じ込められる場合に、自動詞として語彙化されるものであるとされる。

さらに、このパターンの対立は意味的な対立を伴い、必ずしも項の統語的配列を変化させない。

(25a) *John hit Bill.*

(25b) *John hit himself.*

(Shibatani 2006: 232)

能格／逆受動の対立 (ergative/antipassive opposition) :

行為が完全に発展し、受動者に対して意図された効果を達成するかどうかに焦点を当てる。逆受動文は、受動者への意図された影響が達成されない状況、または動作主に全体的な影響を与えない状況を示す。逆受動態は、受動者の談話上の関連性が低いことを示すため、動詞の項の数を減少させる機能がある。

Ⅲ. 行為の終結に関するパラメーター :

このパラメーターは、行為が通常のコースを超えて発展し、イベントの直接的な参加者を超えて追加の存在 (受益者／被害者) に終結し、新たな終点としてその影響をもたらすかどうかを問う。

(受益／被害／適用) (Benefactive/Malefactive/Applicative) の対立：

これらは行為が対象となる受動者を超えて、追加的な第三の参与者に影響を及ぼす状況を表すため、談話場の関連性を持ち、動詞の項の数を増加させる機能がある。

以上の3つの種類の対立に加えて、Shibatani (2006) は語用論的に動機づけられたヴォイスシステムの検討も行った。上述の3種のタイプを行為の起源と、「順行 (Direct) / 逆行 (Inverse) 対立」と「能動 (Active) / 受動 (Passive) 対立」を終結することに対する相対的な談話上の位置づけとして捉えている。

これらの概念的パラメーターは、ヴォイスが単なる形態論的・統語論的な現象ではなく、人間の行為認知に基づく普遍的な概念的意味を持つことを強調し、能動態／受動態の対立にとどまらない広範な言語現象を統一的に説明するための枠組みを示している。つまり、Shibatani (2006) は通常の能動／受動のような形式的な区別に限られず、行為がどのように始まり、どのように展開し、どのように終わるかという認知的観点から理解されるべきであると主張している。

4.3 Zúñiga and Kittilä (2019)

Zúñiga and Kittilä (2019: 9) はヴォイスについて次のように説明している。

Voice as understood in the present study Voice as understood in the present study is based on semantics and syntax. It defines diatheses as mappings of the roles of the semantic arguments of predicates onto grammatical relations in clauses, and voices as diatheses formally marked on predicates.

つまり、Zúñiga and Kittilä (2019) は意味論と統語論に基づき、述語の意味的項 (semantic arguments) を節内の文法関係へと対応づけるものとして定義し、ヴォイスとは、述語に形式的に標示された態として定義している。

Zúñiga and Kittilä (2019) の議論で明らかになったのは、再帰文が単に「主語と目的語が同一である」というだけでなく、受動態や逆受動態など他の態へと文文化・発展する動的なプロセスを含んでいるということである。Zúñiga and Kittilä (2019: 225) は再帰代名詞に由来する受動構文への発展パターンは特にインド・ヨーロッパ語族 (ロマンス語、バルト・スラヴ語、スカンジナビア・ゲルマン語) に広く見られ、フランス語の“se”, ポーランド語の“się”, ロシア語の“-sja/-s”, スウェーデン語の“-s”などが挙げられている。ただし、このような再帰形式の受動化はヨーロッパ以外の言語では比較的まれである。また、ポーランド語の“się”は動詞の逆受動化にも転用されており、ティルマガ語 (スーダン) の相互接辞“-inen”も逆受動マーカーとして再分析された例が示されている (Zúñiga and Kittilä 2019: 227)。

また、Zúñiga and Kittilä (2019: 229-231) は再帰標識 (reflexive markers) の起源について、以

下の4つのタイプに大別している。再帰標識としてよく用いられる名詞には身体部位名詞が多く、モルドヴィン語やカーボバルデ・クレオール語では「頭」、アラビア語では「魂」、ブーラ語では「体」を表す語が起源となっている。また、「自己」を意味する名詞（フィンランド語 *itse* など）もこうした起源となる。

次に代名詞が起源となる場合もあり、強調代名詞（アイルランド語 “*é féin*”）や人称代名詞の目的語（ドイツ語 “*mich*”）などが該当する。また、動詞が再帰標識の起源となることは稀だが、サヌマ語の “*ko-*” 「*return*」（戻る）という意味の動詞が再帰動作を表すことがある。

さらに、副詞や前置詞が再帰標識になることも稀にあり、Ute（ユート語）では “*nanóqs*” 「*alone*」（一人で）、ビスラマ語では “*nomo*” 「*only*」（だけ）などの副詞や “*tì*” 「*on*」（～の上に）などの前置詞が用いられる。一方、ザンデ語の “*Mí-ḵimí tí-rè*”（私は自分を殺す）のように、前置詞 “*tì*” (*on*) が再帰標識として用いられる事例は珍しいとされる。

このように再帰標識の起源は多様であり、再帰性という概念が意味的にも形式的にも複雑であることを示している。そして、再帰構文の研究には通時的かつ類型論的な視点が不可欠であることを強く示唆している。

5. 日本語における再帰態の有効性の検討

前節の一般言語学からの考察に基づき、ヴォイスは単なる構文的变化にとどまらず、行為の意味的性質や参与者の認知的関与に深く根ざした、概念的かつ言語普遍的な現象であることが明らかになった。

Shibatani (2006) は、従来の印欧語中心の「能動／受動」対立に代わり、「能動／中動」、「使役／非使役」、「意志性／自発性」、「能動／逆受動」の対立などを含む拡張的なヴォイス理論を提示する。その立場では、再帰態は中動態の中核を構成し、意味構造および参与者の関与性質に基づき理論的に再定義される。

一方、Zúñiga & Kittilä (2019) は、再帰構文をヴォイス体系の中で文法化や派生的変化の起点となる構造と捉え、再帰標識の起源や機能に焦点を当てる。

5.1 再帰態と類似概念

なお、日本語における再帰態の有効性を検討するにあたっては、まず再帰態と混同されやすい用語である再帰中間態や中間態（中相態）との実質的な違いを明確にしておく必要がある。

国広 (1995) は、本来は他動詞であるが、表面的には自動詞のように振る舞う用法を再帰中間態と呼んでいる。例えば、「寄せる波」という表現に対応する「波が寄せる」という表現は「波がみずからを寄せる」という意味低層が想定される。そのため、このような他動詞の形を取りながら自動詞的な用法を持つ表現が再帰中間態に該当するとされる。ほかに「腹が張る」、「熱

がひく」などの用法も再帰中間態の例として挙げられている。

また、国広（1995）は「中間態」についても次のように述べている。日本語の中間態研究は主に英語の中間態（middle voice）研究に触発し、展開されてきたものである。両言語ともに、元の動詞は他動詞であるが、英語では動詞の形を変えずに自動詞的な用法として用いるのに対し、日本語では可能形に派生させることによって自動詞的に使う傾向がある。2.1節で述べた中相動詞はこれに相当する。代表的なとしては、「このナイフはよく切れる」とか、「この本はよく売れる」などがある。

さらに、国広（1995）再帰中間態と中間態の違いについて次のように分類している。

中間態の特徴：

- (A) 主語の属性を表わす（眼前に動きは見られない）
- (B) 外部動作主を含む（表現されないが、意味的に存在する）
- (C) 述語が新情報を含む。

再帰中間態の特徴：

- (D) 主語は動作主で同時に目的語である
- (E) 特定の主体の特定の出来事についても用いられる。

先行研究では再帰態は中動態の延長線に位置づけられる共通点が指摘されている（亀井ほか（編）1996, shibatani 2006）。また、通時的観点から、インドヨーロッパ語族においては、中動態が受動態や再帰動詞の発達に不可欠な役割を担い（（亀井ほか（編）1996）、再帰態が受動態・逆受動態の発展に影響を及ぼすとされる（Zúñiga & Kittilä 2019）。

ただし、印欧諸語では中動態・再帰態の形態的体系が高度に確立しているのに対し、日本語では形態的カテゴリーの整備が十分に進んでおらず、もっぱら意味的側面で関与していると考えられる。本稿では、このような類型的差異を踏まえ、上述の再帰中間態および中間態は再帰態の検討対象から除外する。

5.2 日本語の再帰態の有効性

以上、再帰中間態と中間態は一見類似しているが、実際には異なる概念であることが確認された。次に、再帰態として扱われる表現の特徴について考察する。

5.2.1 日本語における再帰文の文法特性

日本語においては再帰性を形態論的に示す仕組みが存在せず、意味や文脈に依存するという言語特性がある。⁷ 再帰構文は統語的には通常他動詞文と同様「XがY（を）V」の構造をとるが、その再帰性は形態的にはなく、意味的に読み取られる。

(26) 花子はワンピースを着る。

(27) 花子は顔を洗う。

本稿では(26)～(27)のような他動詞句のうち、行為の対象が行為者自身の身体部位あるいは付着物である文を再帰文と呼ぶこととする。これらの表現においては、花子が行為者であると同時に、その動作によって影響を受ける対象でもある。以下では、このような表現は再帰態としてヴォイスの体系に含められるかどうかについて検討を進める。

一般にヴォイスは、動詞の形態変化と格構造の変化を伴って、事態の関与者のうち、どれを文の主たる焦点として取り上げるかを示す文法的カテゴリーとされている。この観点から見ると、(26)～(27)の文は対応する自動詞句を持たず、また、典型的な二項構造の他動詞句でありながら格シフトが起こらないため、格構造や動詞の変化という伝統的な態の定義を認定基準とするなら、再帰態というカテゴリーを設けることには慎重な検討が必要である。次に日本語の再帰標識をめぐる再帰態のあり方を検討する。

5.2.2 日本語の「自分」から見る再帰標識

4節で述べたように、Zúñiga & Kittilä (2019) は言語類型論の観点から再帰標識の起源を検討し、その起源を「名詞」「代名詞」「動詞」「副詞・前置詞」の4種類に分類している。

日本語の「自分」については、黄(2025)はHirose(2014)などの先行研究を踏まえ、「自分」には再帰的用法(reflexivity)、視点的用法(viewpoint)、および話者指示的用法(logophoricity)の三つの機能があることを確認している。

従来、「自分」を再帰代名詞として認める立場がある⁸一方で、黄(2025)は主として再帰的用法に焦点を当て、「自分」の文法機能を考察しているが、「自分」が再帰標識としての有効性を直接検証していない。それでも、現代日本語では「自分」が主語という先行詞と対応する用法を持つだけでなく、自称詞として、さらには関西方言における「どうしたん、自分」のような対称詞としても用いられることを指摘している。

⁷ 黄(2024)(2025)を参照されたい。黄(2024)は日本語における再帰性の概念は動詞によって決まるわけではなく、目的語を取るその動詞句で決まるということを主張した。黄(2025)では、フランス語を代表とする西欧言語における再帰性の特徴について論じて、「フランス語における再帰性は、再帰代名詞が動作主と直接目的語の同一性を明示する点に特徴がある。」と述べた。例えば、“se lever”のような表現では、「自分自身を起こす」という意味が形式的に固定されており、対格再帰代名詞の使用によって再帰性が明確に示される。一方で、日本語には再帰性を明示する形態論的な仕組みが存在せず、再帰性の判断は文脈や意味解釈に依存する傾向が強いと指摘した。

⁸ Hirose(2014: 3)は日本語には「自分」、「己」、「自ら」、「自身(特に「自分自身」や「彼自身」のような形で)」、そして「我」など英語の再帰代名詞に相当する様々な“self”を表す語が存在し、これらはいずれも再帰標識(RM)として使用できると述べている。

以上から、日本語には形態的な再帰標識が存在しないと考えられる。

5.2.3 日本語の再帰文の意味論的分析

前述のとおり、日本語の再帰性は意味や文脈によって決定づけられる。本節では、こうした意味的な側面に注目し、再帰態の可能性を検討する。まず、再帰動詞や再帰性に関する既存研究を提示した上で再帰性の定義を概観する。

黄（2024）は「再帰性の概念を独立して設定する必要はない」という見解を再検討し、この立場に反論している。プロトタイプ論に基づき、自他動詞のプロトタイプの意味特徴を踏まえ、再帰性の意味特徴を次のように定義した。

[A] 関与している人物あるいは事物は二つあり（動作者と対象物は無生物の場合もある）、行為者と対象物は同一の実体である。

[B] 対象物は変化を被り、それと同時に働きかけが行為者にも変化を与える。

黄（2024）では権（1996）と李（2019）を参照していなかったが、両者も再帰性の有効性を論じており、ここではその点を補足し、研究の立場を整理しておきたい。権（1996）は他動性との比較から、動詞の「方向性」と「所有性」が再帰性に特有の重要な特徴であると指摘する。具体的には、「動作主を軸とする求心的な運動を表す」こと、および「動作主と対格との間に所有関係がある」ことを挙げている。権の見解によれば、一般的な他動詞文は遠心的な運動方向を示すのに対し、再帰文は求心的な方向性を示す。

李（2019）は再帰性の基準として、「動作主」、「動作主自身」、「変化」および「求心的」を挙げ、以下の特徴をまとめている、

- (i) 参加者は動作主と対象の二つの要素がある。
- (ii) 動作主から対象に対して動作の働きかけがある。
- (iii) 対象が動作主あるいは動作主の一部である。
- (iv) 働きかけが動作主に回帰する。

李（2019）も自他動詞のプロトタイプ意味論を踏まえ、再帰性の有効性を検討しているが、黄（2024）の定義は主語が無生物の場合にも適用可能である点などで異なっている⁹。また、李

⁹ 黄（2024）は再帰性のパラメーターを設定していないが、意味論・語用論的な側面に焦点を当て、後述するように、日本語には再帰動詞が存在せず、再帰性を論じるには句レベルの文脈が重要だと主張している。したがって、再帰動詞に関して、権（1996）および李（2019）とは異なる立場を取っている。

は以上の「事態に関与している参加者の数」, 「動作主から対象に対して動作の働きかけ」, 「対象が動作主あるいは動作主の一部」, 「働きかけが動作主に回帰する」のようにパラメーターを設定した上で、再帰性を次のように定義している。

「動作主から発する働きかけが自分自身あるいはその一部分に回帰し、動作対象の変化によって、動作主に状態変化を引き起こす概念。」

以上の議論を踏まえると、意味論や認知意味論の観点から再帰性は一定の有効性を持つといえる。Shibatani (2006) が指摘する「行為が行為者の領域内に限定される」という意味特性を考慮すれば、再帰態というカテゴリを設定する可能性も認められる。

これに対し、黄 (2024) は日本語には形態的な再帰動詞は存在せず、語彙的な再帰用法はあるものの、従来の着脱動詞や「浴びる」を再帰動詞とみなすのは不適切だとする。さらに黄 (2025) では、「着る」「かぶる」なども文脈によって再帰性が失われる現象を指摘する。例えば「崩壊の波をかぶる」では、主体と目的語の同一性が保持されず、再帰性は認められない。

したがって、これらの動詞は必ずしも語彙的な再帰性を持つとは限らないと結論づけられる。この点から見ると、従来「再帰動詞」とされてきた動詞は形態的に判別できず、動詞自体の形態変化も伴わないため、ヴォイスの特徴を備えるとは言い難い。

6. おわりに

本稿では、日本語におけるヴォイス概念とその体系的構成を整理し、とりわけ再帰態の有効性と体系内での位置づけを検討した。先行研究の比較から、日本語のヴォイス研究は能動・受動・使役を中心としつつも、自他対応、可能態、再帰態などの扱いにおいて見解が分かれることが明らかになった。

一般言語学の視点からは、ヴォイスは単なる形態的变化にとどまらず、行為の意味的性質や参加者の認知的関与に基づく概念的カテゴリーであり、再帰態は中動態の延長線に位置づけられることが示唆された。

日本語の場合、形態的な再帰標識や再帰動詞は存在せず、再帰性は専ら意味や文脈に依存する。このため、再帰態をヴォイスの一形態として設定するには、形態・統語面だけでなく意味論・認知論的な基準を重視する必要がある。さらに、従来「再帰動詞」とされてきた語も文脈によって再帰性を失い得ることから、その語彙的な再帰性についても再検討が求められる。以上より、日本語における再帰態の有効性は限定的であるが、意味的・認知的観点を導入することで、ヴォイス体系の一部として理論的に位置づける可能性は残されている。

(こう めいくん・言語科学研究室)

参考文献

- 亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）（1996）『言語学大辞典（第6巻・術語編）』三省堂.
- 金田一春彦（1954）「時・態・相および法」『日本文法講座』1，明治書院，pp.223-245.
- 金水敏（2014）「ヴォイス2」日本語文法学会（編）『日本語文法事典』大修館書店，pp.43-46.
- 黄銘君（2024）「日本語における再帰性の研究」『研究論集』23，北海道大学大学院文学院，pp.269-282.
- 黄銘君（2025）「着衣動詞の意味拡張——再帰性と比喩表現の考察——」『国語国文研究』第164号，北海道大学国語国文学会，pp.55-72.
- 黄銘君（2025）「「自分」の再帰的な用法に関する考察」『研究論集』24，北海道大学大学院文学院，pp.193-204.
- 国広哲弥（1995）「日本語の再帰中間態」『言語学林』1995-1996，三省堂，pp.417-424.
- 佐藤琢三（2005）『自動詞文と他動詞文の意味論』笠間書院，pp.184-199.
- 鈴木重幸（1972）『日本語文法・形態論』むぎ書房.
- 高橋太郎（1985）「現代日本語のヴォイスについて」『日本語学』4-4，明治書院，pp.4-23.
- 寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味』第I巻，くろしお出版，pp.205-318.
- 益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法（改訂版）』くろしお出版，pp.104-106.
- 村木新次郎（1991）「ヴォイスのカテゴリーと文構造のレベル」『日本語のヴォイスと他動性』仁田義雄（編）くろしお出版，pp.1-30.
- 早津恵美子（2005）「現代日本語の「ヴォイス」をどのように捉えるか」『日本語文法』5巻2号，くろしお出版，pp.21-38.
- 仁田義雄（1982）「再帰動詞，再帰用法—Lexico-syntaxの姿勢から—」『日本語教育』47号（初出），仁田義雄（2010）『語彙論的統語論の観点から』，ひつじ書房，pp.120-131.
- 日本語記述文法研究会（編）（2009）『現代日本語文法』2第4部ヴォイス，くろしお出版，pp.207-300.
- 仁田義雄（1981）「ヴォイス」『日本文法事典』有精堂出版.
- 林青樺（2009）『現代日本語におけるヴォイスの諸相』くろしお出版.
- 權勝林（1996）「ヴォイスの体系における〈再帰性〉：日・韓対照研究」博士論文，大阪大学.
- 李静（2019）「日本語における再帰性をもつ他動詞構文についての体系的研究」博士論文，九州大学.
（未公開）（2025年4月閲覧）
- Crystal, David (2003). *A Dictionary of Linguistics and Phonetics*. 5th ed. Oxford: Blackwell.
- Hirose, Yukio. (2014) The conceptual basis for reflexive constructions in Japanese, *Journal of Pragmatics*, 68.
- Hopper, Paul J. & Sandra A. Thompson (1980). Transitivity in grammar and discourse. *Language* 56: 2, pp. 251-299.
- Shibatani, Masayoshi (2006). On the conceptual framework for voice phenomena. *Linguistics* 44-2, pp.217-269.
- Zúñiga, Fernando; Kittilä, Seppo (2019). *Grammatical Voice*. Cambridge University Press.